

8

より 6 ■ ■ ■ 8 6
 ■ ■ 3 3 9 ■
 号を遺伝子同様、合体させたらどうでしょう。それから、十二月の巡りに合わせて十二桁でしよ。うから、毎月とは言いませんが、せめて春夏秋冬の季節感を味わいたいものです。いまマイウイ
 ンターナンバーを身にまとっています。春めいてきたのでそろそろ、マイスプリングナンパーに衣替えしませう。

既越

号を喜んでいない者も中にはいます。誰もがながらしりくるナンバーに当たると、スロットマシン

6

4

3

0

9

案提 アツパ 制度 ナン

マイ ますお札を申し上げます。私にぴったり合う6 ■ 8 9 ■ 3 ■ 3 ■ 6 ■ をつけていただき感謝しています。もともとアイデンティティーの定まらない人間でしたが、この番号を与えられ、自分をちゃんととらえることができました。これから社会の一員として、十二桁に見合う役割を果たしたいと思えます。そして欲を言えば、より豊かな制度にするために、さらなる工夫があってもいい気がします。私は6と9と3がバランスよく配置されてステキです。でも自らの番

8

5

3

1

9

6

0

6

3

7

2

5

1

アーサー・ピナード 1967年アメリカ・ミシガン州生まれ。詩人。90年に来日し、日本語でも詩作を始める。本誌での連載は2000年より、『日本語ぼりぼり』(小学館)で講談社エッセイ賞、『ドームがたり』(玉川大学出版部)で日本絵本賞、紙芝居『ちっちゃいこえ』(童心社)で第58

回五山賞特別賞。昨年10月、想いをもちて未来のために活動する人を応援する『第7回 澄和Futurist賞』を受賞。新刊本は待望の文庫化『日本語ぼりぼり』(小学館文庫)。本人が丹誠込めて毎週お届けしている「アーサー・ピナード ラジオぼりぼり」(文化放送/金曜夜8時放送)は30分番組とは思えないほど深く、示唆に富む内容。ぜひ一度聴いてみてください。



来ないけど、きみは気にしないだね」
 気にしていることをそう言われてぼくは首を
 横に振るような縦に振るような伸びをして
 彼の眼を見つめた「気にしていると感じた。
 「太平洋は全部つながってるからな」
 ぼくが言うと、彼はうなずいて
 「このあたりは濃いぬねだね」とつぶやき、
 右の足首にリーシューズコードを巻いた。
 ぼくは利き足の左のほうにリーシューズを巻き、
 あとについて、太平洋へ入った。

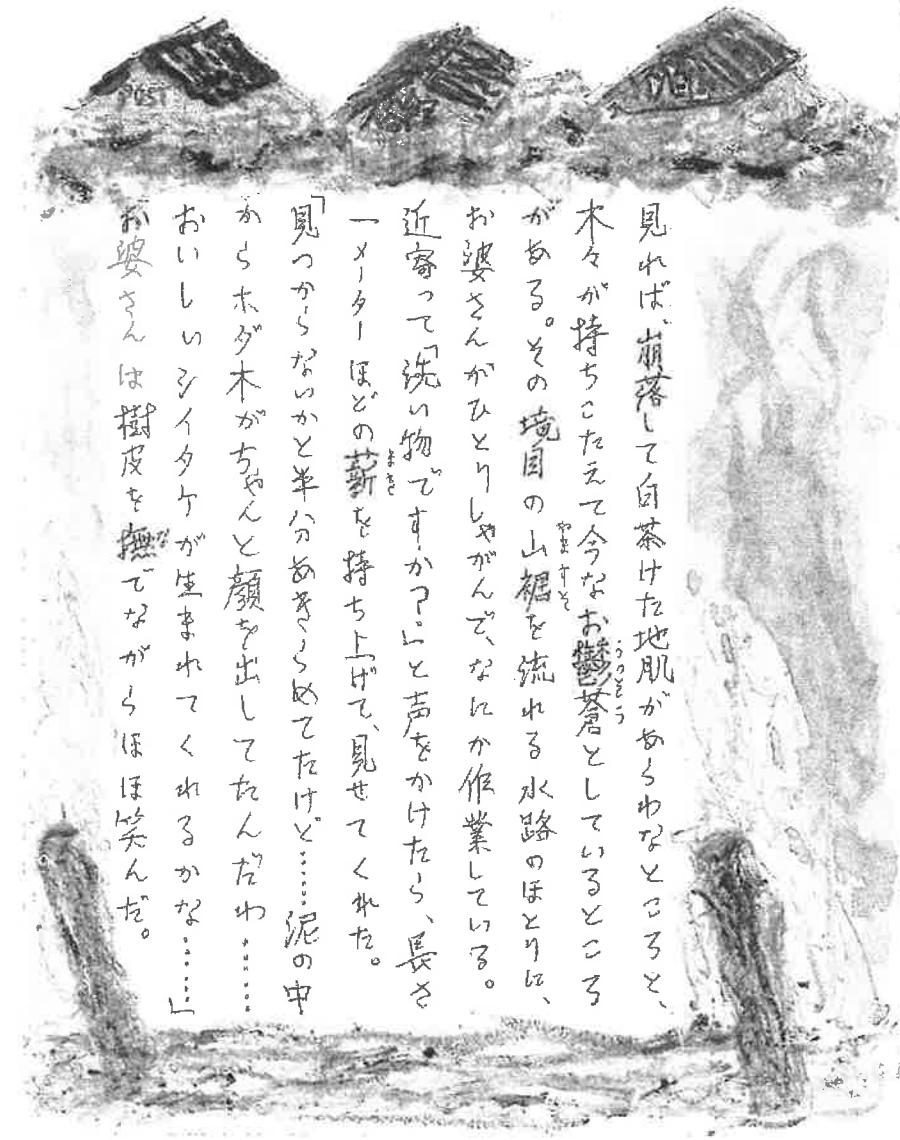
アーサー・ピナード 1967年アメリカ・ミシガン州生まれ。詩人。1990年に来日し、日本語でも詩作を始める。本誌での連載は2000年より、『日本語ごりごり』(小学館)で講談社エッセイ賞、『ドームがたり』(玉川大学出版部)で日本絵本賞、紙芝居『ちっちゃいこえ』(童心社)で第58回



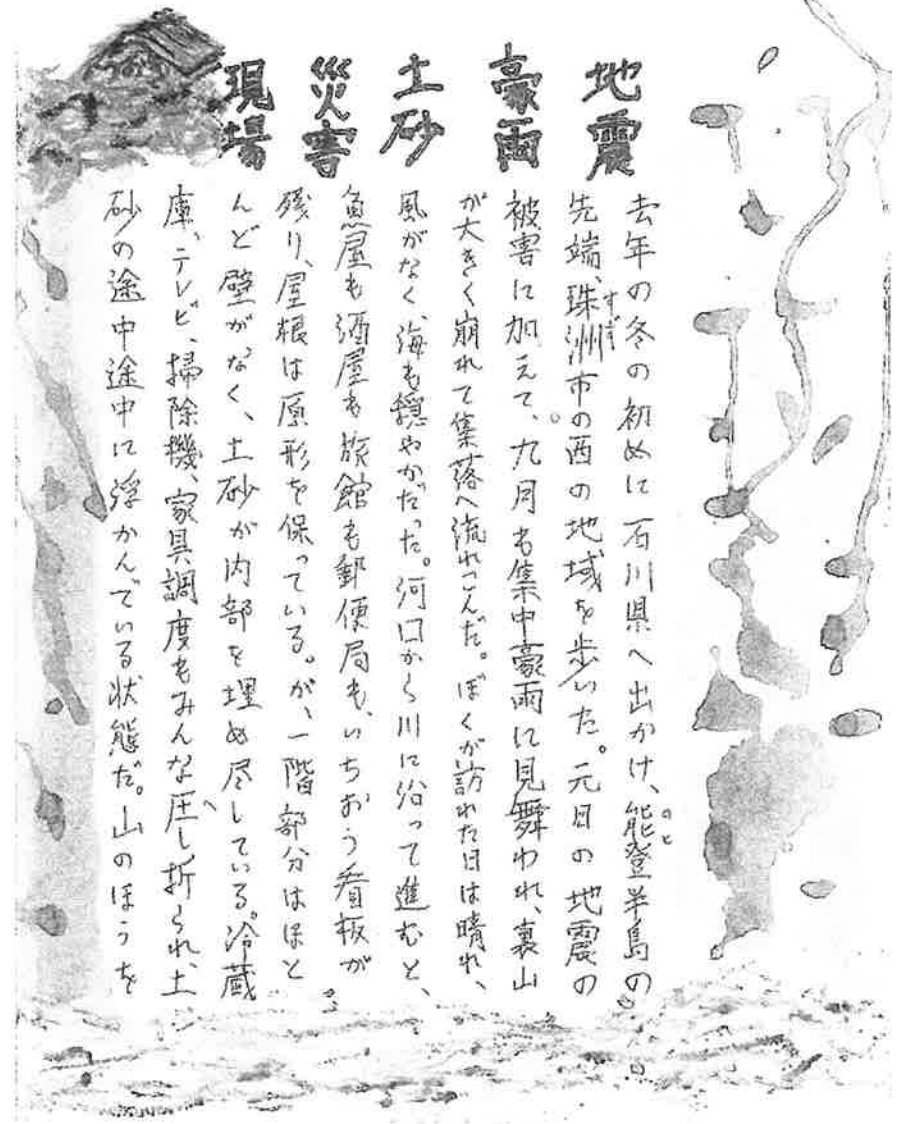
鳥崎 からすさぎ
 ポイント

福島 駐車場の隅に砂の吹きたまりができています。
 県 車の後ろでウエットスーツに着替わえ、
 南相馬 ボードを脇にかかえて浜へおりに行く。
 市 頭上で雲雀がさえずり、沖では数人の
 鹿島 サーフアーが波を吟味している。一人
 波打ち際でストレッチをししている者も。
 彼の近くでストレッチを始め、会釈して
 「どこから」と聞かれ、少し話すと
 最寄りのサーフショップの店主とわかる。
 「だいたいみんな嫌がってここへは

五山賞特別賞。2022年10月、想いをもって未来のために活動する人を応援する『第7回 澄和Futurist賞』を受賞。本人が丹誠込めて毎週お届けしている「アーサー・ピナード ラジオごりごり」(文化放送/月曜夕方6時30分放送)は30分番組とは思えないほど深く、示唆に富む内容。ぜひ一度聴いてみてください。



見れば、崩落して白茶けた地肌があらわなところと、木々が持ちこたえて今なお鬱蒼^{うっそう}としているところがある。その境目^{やますそ}の山裾^{やますそ}を流れる水路のほとりには、お婆さんがひとりでしゃがんで、なにが作業している。近寄って「洗^{すす}い物^{もの}ですか？」と声をかけたら、長さ一メートルほどの薪^{まき}を持ち上げて、見せてくれた。「見^みつからないかと半分^{はんぶん}かあきまわしてあげたけど……泥の中^{どろのなか}からホダ木^{ほだき}がちやんと顔^{かほ}を出してたんたわ……おいしいシイタケ^{しいたけ}が生まれてくれるかな……」お婆^{おばあ}さんは樹皮^{じゅくわ}を撫^{なで}てながらほほ笑^{わら}んだ。

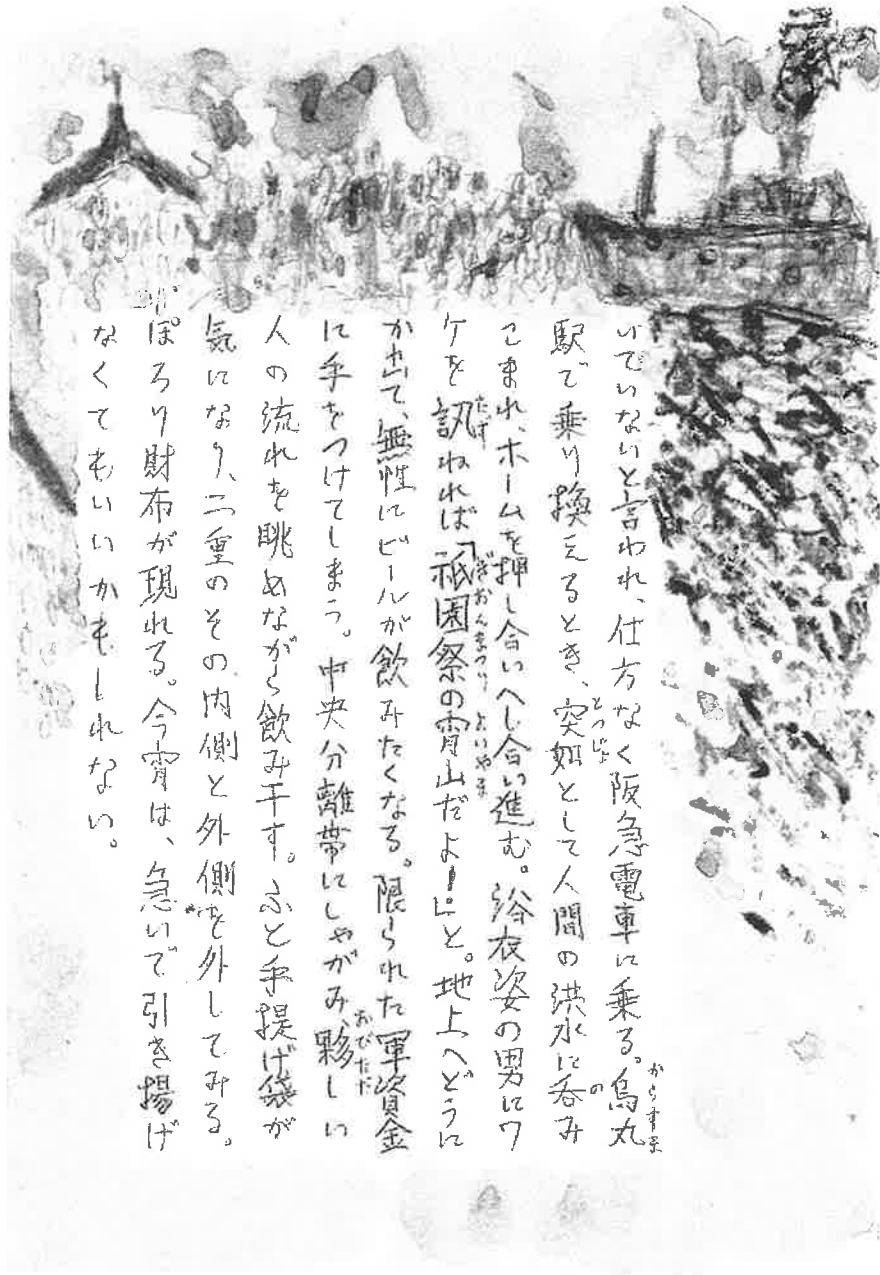


地震 去年の冬の初めに石川県へ出かけ、能登半島の先端^{すんぽん} 珠洲^{すしゅう}市の西の地域を歩いた。元日の地震の被害に加えて、九月も集中豪雨に見舞われ、裏山が大きく崩れて集落へ流れこんだ。ぼくが訪れた日は晴れ、風がなく、海も穏やかだった。河口から川に沿って進むと、魚屋も酒屋も旅館も郵便局も、ちおう看板が残り、屋根は原形を保っている。が、一階部分はほとんど壁がなく、土砂が内部を埋め尽くしている。冷蔵庫、テレビ、掃除機、家具調度もみんな押し折られ、土砂の途中途中に浮かっている状態だ。山のほうを

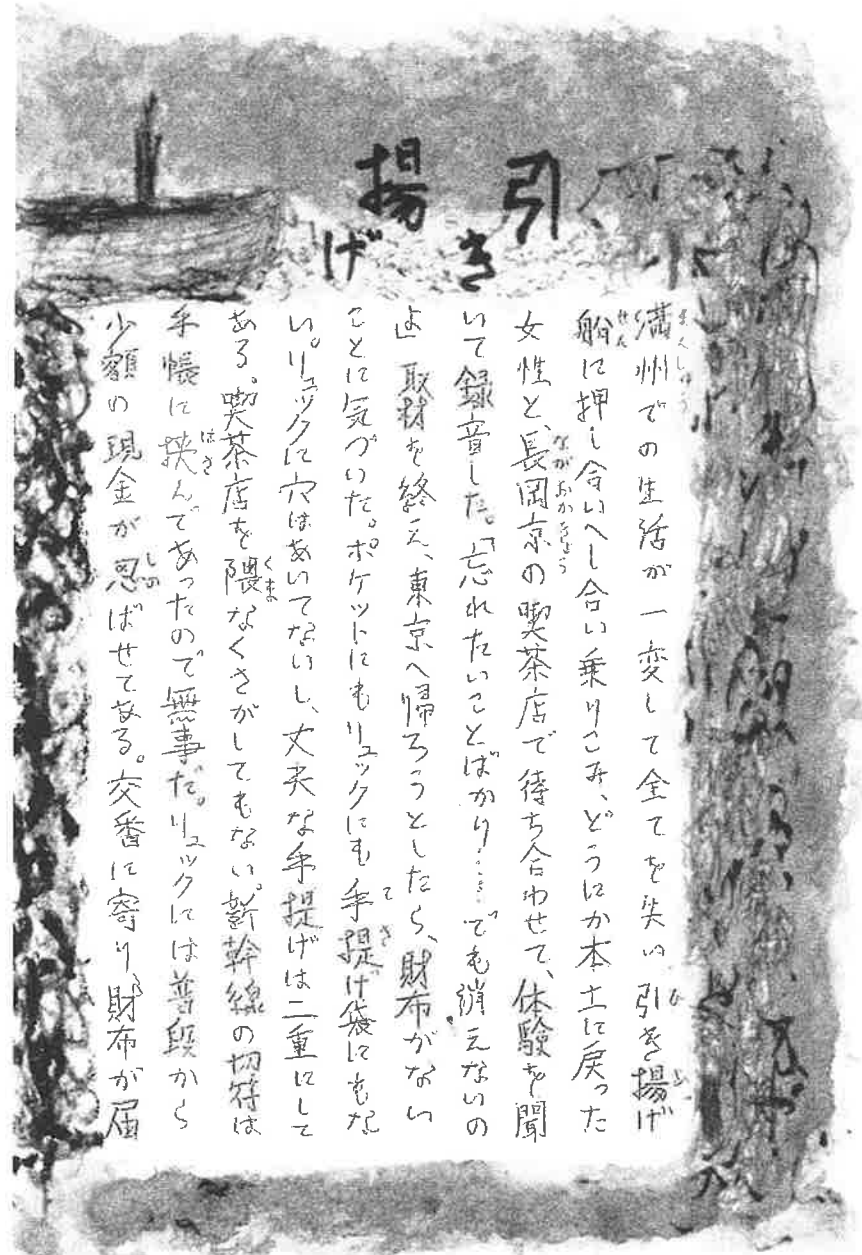
土砂

災害

現場



いでもないと言われ、仕方なく阪急電車に乗る。烏丸
 駅で乗り換えるとき、突如として人間の洪水に呑み
 こまれ、ホームを押し合いへし合い進む。浴衣姿の男はワ
 ケを訊ねれば、祇園祭の宵山だよ！と。地上へどうに
 か出て、無性にビールが飲みたくなる。限られた軍資金
 に手をつけてしまふ。中央分離帯にしゃがみ、夥しい
 人の流水を眺めながら飲み干す。ふと手提げ袋が
 気になり、二重のその内側と外側を外してみる。
 ぽろり財布が現れる。今宵は、急いで引き揚げ
 なくてよいのかを、しれない。



引き揚げ

満州での生活が一変して全てを失い、引き揚げ
 船に押し合いへし合い乗りこみ、どうにか本土に戻った
 女性と、長岡京の喫茶店で待ち合わせ、体験を聞
 いて録音した。「忘れたいことはかり、でも消えな
 いよ。取材を終え、東京へ帰ろうとしたら、財布がない
 ことに気づいた。ポケットにもリュックにも手提げ袋にもな
 い。リュックにはほおひてないし、丈夫な手提げは二重にして
 ある。喫茶店を隈なくさがしてもない。新幹線の切符は
 手帳に挟んであったので無事だ。リュックには普段から
 少額の現金が隠ばせてある。交番に寄り、財布が届

Arthur Binard

アーサー・ビナード 1967年アメリカ・ミシガン州生まれ。詩人。1990年に来日し、日本語でも詩作を始める。本誌での連載は2000年より。『日本語ぼりぼり』(小学館)で講談社エッセイ賞、『ドームがたり』(玉川大学出版部)で日本絵本賞、紙芝居『ちっちゃいこえ』(童心社)で第58回

五山賞特別賞、原題を体験した子どもたちの作文を土台にした絵本『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』(いわさきちひろ・絵/童心社)に文章と詩を寄せている。ラジオ番組「アーサー・ビナード ラジオぼりぼり」(文化放送/毎週月曜17時30分放送)、NHKラジオ第1「出張ラジオ 能登半島へ」(9月15日(月祝)18時5分~19時55分)出演予定。*「らじる★らじる」で1週間聴き逃し配信有。